

仙台七夕まつり

8月の3日間、仙台中で、手作りの大きな紙飾りが何百も竹の枝から吊り下げられ、街中に色彩のカーテンが誕生します。仙台七夕まつりは、8世紀から日本で祝われているロマンティックな伝統から進化したものです。ねぶた祭（青森）や竿燈まつり（秋田）と並んで、東北地方の三大夏祭りの1つになっています。

時期と場所

このお祭りは、毎年8月6日から8日に開催されます。これに先立って、8月5日の夜には花火が打ち上げられます。街のアーケードや商店街に沿うようにして装飾が配置され、宮城県庁近くにある勾当台公園の舞台では出し物が上演されます。

七夕の起源

七夕は中国が起源のお祭りで、8世紀半ばに日本に導入された際には、まずは朝廷で祝われました。

七夕の中心にあるのは、天にいる2人の恋人の物語です。この2人は、旧暦7月7日の夜を除いて、逢うことが禁じられています。願いごとを色付きの紙片（短冊）に書き、飾りつけた竹の枝に吊るす慣習があります。

仙台の飾りつけ

仙台七夕まつりの飾りつけの意匠には短冊だけではなく、折り紙の鶴・着物・財布、また漁網や編み籠を思わせる複雑な吹き流しなどがあります。これらの意匠の多くは、仙台七夕まつり独特のもので、それぞれの意匠は何かを象徴しています：たとえば、財布は富と繁栄を表しています。また、吊られた網のような飾りつけは、長さ数メートルを超える場合もあり、豊漁・豊作を意味します。勾当台公園にある窓口を訪れた人々は、自分の願い事を短冊に書くことができます。

七夕と伊達政宗

七夕は、江戸時代（1603～1867 年）の初期に、国中で広く祝われるようになりました。七夕は仙台に根づいたのは、伊達政宗（1567～1636 年）が 17 世紀初頭に仙台を築いた後、七夕を普及させたのが始まりです。仙台の七夕祭りはそれ以来、日本で最大のものの 1 つとなっています。